

令和5年度 第3回北海道 Society5.0 推進会議 「データ利活用ワーキンググループ」開催概要

1 日 時

令和6年1月17日（水）14:00～16:00

2 実施場所

かでの2. 7 940会議室

3 出席者

別添「出席者名簿」のとおり

4 議 題

別添「次第」のとおり

5 議 事

(1) 議事1 本日の会議について

・事務局（北海道）から説明（資料1）

(2) 議事2 道の取組報告及びデータ利活用・連携基盤の調査報告

・事務局（北海道）から説明（資料2） ※データ非公開

(3) 議事3 データ利活用ワーキンググループの取りまとめ

・事務局（北海道）から説明（資料3）

(4) 議事4 意見交換

- データ利活用の重要性を上げていくことが大事だということを改めて感じた。
- AI を使うということ、実際にデータを活用するときに何か具体例がないとよく分からないことから事例を作るといこと、それを通じて人材育成することの3点をもって、色々なところに理解を促すという方向性に集約されるのかと思う。
- AI の話題は、オープンデータを活用する上では切り離せない。日本でも国産の大規模言語モデルの開発が進んでいるので、2024年の予測は難しいが、動きをキャッチアップして、どうアクションを起こしていくかが必要になってくる。
- 生成AIが広く利用されてきている中、生成AIが作成したデータがオープンデータとなり、それが学習データとして使われると、知識や生成物に変な方向に変化していく現象が知られている。この問題に対処するためには、人が作成したデータを正確なものとして導入し、生成物に適切なバイアスをかけるなどして、人の価値観に合致したものに調整していくことをしていかないと、この先のAIの質が保てないと言われているので、きちんと作ったデータの重要性が増していくと思う。
- 日本は課題先進国であるが、北海道は先進国の中での課題先進エリアトップだと思う。他の都道府県がやるからうちもやるというよりは、ほぼ先頭を切らなきゃいけない立場じゃないかなと思う。
- 新聞記事に掲載されていた「8掛け社会」は、今までの仕事を10人でやれなくなるから、8人でやれる方法を考えるもので、そうした時にAIが必要になるというもの。北海道の人口減少を考えた際、ライドシェアや寄り合い、AIを活用することが考えられる。将来、物理的なものとソフト的なものが組み合わさった社会が生まれていくとすれば、基盤を作るのがゴールじゃなく、何のためにやるのかということ言語化してあげないといけない。

- 多くのチェーン店がタッチパネルのオーダーシステムに移行している中、SNSに「スタッフに言った方オーダーした方がリアクションが早いから、全然便利なシステムになっていない。」といった投稿がされていたが、そもそも人が居ないので、機械に代行せざるをえなく、過去と同じレベルを求められないことを分かっていないので、そこを皆の共通認識にしないといけない。
- 実地行政単位で、医療、モビリティとかを語るとどうしようもなくなるので、なるべく広域でやることと、事業者を統一するかは別として、どこの事業者が入ってきても、すぐインストールできるようなデータのプラットフォームを用意するのが良いと思っている。
- AIを活用した業務改善をしようとしても、どこから手をつければ良いか分からないことが多いが、月額数百円で議事録や要約の作成、配信までを自動化するサービスが存在している。こうした小規模で実用的な取り組みを通じて、DXのメリットを平場のメンバーに実感させる必要がある。同時に、どのような取り組みが必要かを具体的に示すことが重要。問題解決には小さなステップから始めることが効果的だと思う。
- 海外に向けても、データをオープンにすることは重要。ニセコは開発が進んでいるけれども、富良野とか他の地域にも少しずつ外国人が来ている。これらの地域でリゾート開発に投資をする際には、基礎データが必要で、日本人向けにデータを提供するだけでなく、整ったデータがあると、投資家にとっても検討しやすくなる。例えば、チーム札幌北海道のGXのような取り組みがあるが、北海道のデータが不足していると、投資を検討する人がどれだけその地域を評価できるかを考えると、データの提供が投資を呼び込む上で重要かと思う。
- データ連携基盤について、国から都道府県で統一せよとの話があり、分野ごとに整備しなければいけない。北海道では既に三つの市町村でデータ連携基盤が存在しているところで、これをベースにして進めるのか、それとも新しく一つに統合する方向性を模索するのか、その戦略についても考えていかないといけない。
- データを出して、どういうふうに使われたよというユースケースっていうのがやっぱり必要なかと思いつつ、データ連携基盤とオープンデータの必要性っていうのを、今一度、自治体も理解すべきなのかなと思う。それを使ったことでこういうふうに変わっていくようっていうところを見せて効果を見せていかないと駄目かなと思った。
- 駅前に人がどれぐらい出ているのか、正確性もあるけれども、例えば幹線道路、札幌市とか、室蘭の国道にどれぐらい車が通っているか、人がカウントしなくても、ある程度のラフな調査だったら、カメラでずっと録画して、その道路を通っている車の台数が撮れてしまう。それをそのまま自動でオープンデータに収まるような、車とか人のカウント、公園の利用者数、観光地、どれぐらい駐車場使っているかみたいなものは、カメラで撮れてしまう基礎データもあるので、データを作っていく仕組みを考えないと、8掛け、7掛け社会には対応できないと思う。
- 北海道も、IT産業、デジタル産業の地産地消をやっていくことで、我々が住んでいるところの課題に向き合って開発をしていく、そういったモデルを作っていければいいんじゃないかなと思っている。
- 広域連携だとか、共同利用みたいなお話もあったが、別々のシステムにというところが、データの持ち方も違えば、インターフェースも違うところはあると思うので、それが国の方から、都道府県がうまくコントロールしなさいというふうには話が出てきているようではある

けれども、本当は国のほうで統一するためのルールづくりみたいなところを期待したいと感じた。

- データクレンジングが必要ならデータを整理するための手間も必要、オープンデータも含めてデータ公開全般の話として、何か起きたら対応するのは大変なので、平時から準備して非常時に備えておくためにも、来年以降やっていくであろう人材育成、データを作っていく知識をよりつけていく必要があるかと思う。
- 大学生と企業側が密に触れ合う機会っていうのを創出していかないと DX という文脈で、今回のワーキンググループで出てきた、実践の場が必要だよねっていう話から出てきたアイデアが具現化してきているので、これは取り組んでいきたいなと思っている。
- 今後の推進方策は、「具体的なユースケースの創出」、「AI の活用などによる実践を通じた人材育成」という形で整理させていただき、AI を活用して、データ利活用のインスタンスを作成し、共有実践することで、人材育成を図るといような形で、今年度のワーキングのとりまとめとする。

(5) 議事 5 今後の進め方

・今後の進め方（資料 5）